

第百一回フォト句優秀作品（元年12月11日）

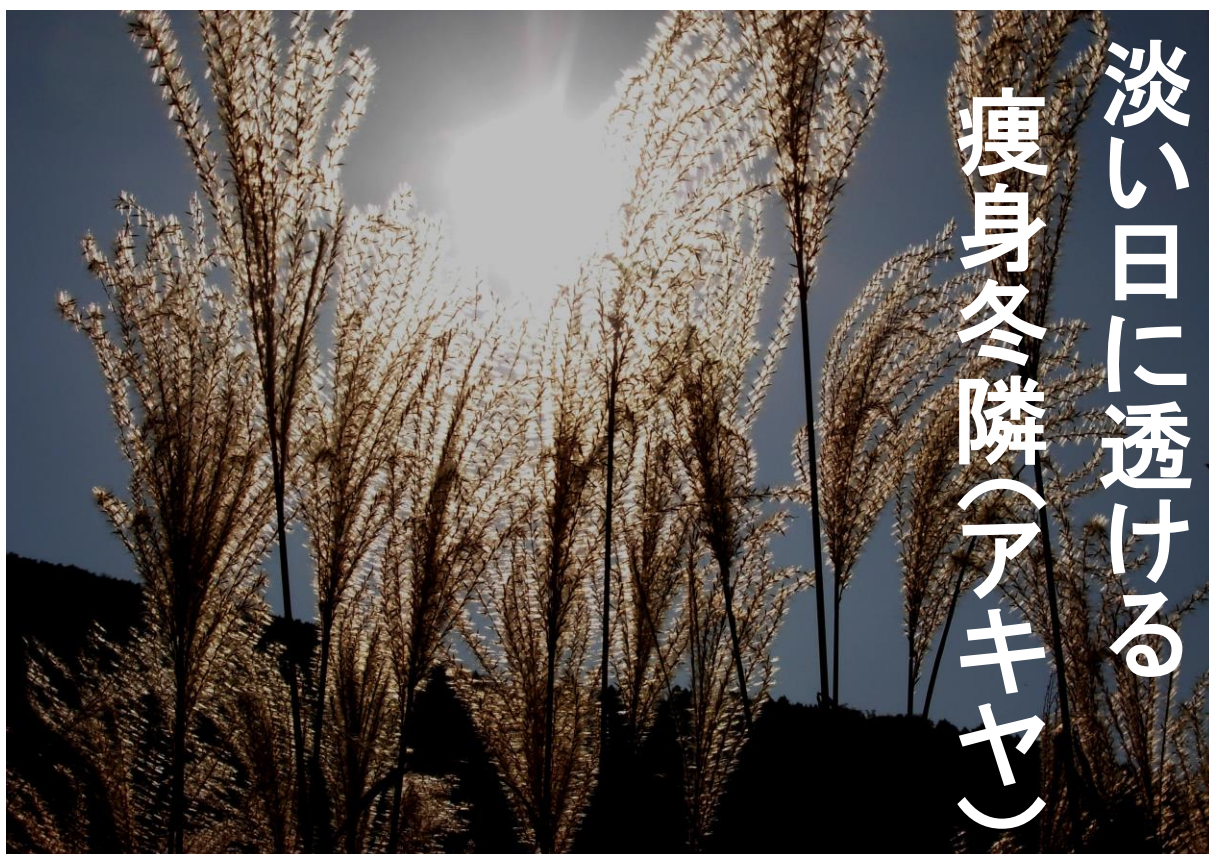


命輝る（晃二）

蔦紅葉松に委ねし

冬はじめ（晃二）

夕映えに輝く並木



老いぬれば涎を垂らす体たらく(昌康)



つつましく
自然と生きる
暮しあり(進一郎)



暮れなずみ燃え木の爆ぜる酉の市 (浩平)

寸 評：

1) 夕映えに輝く並木冬はじめ 安藤 晃二

夕陽が当たる美しい黄葉の並木の画像に素敵な句が付いた。季節が進むにつれ並木道が落ち葉に覆われる。冬はじめの季語が効いている。

2) 蔦紅葉松に委ねし命輝く 安藤 晃二

松の老木にからむ蔦紅葉。句意は枯れて落葉するまでの輝く命を松に委ねているということらしいが、やや判りにくい。

3) 淡い日に透ける瘦身冬隣 中村 晃也

寒い季節に向かう老人の気持ちをススキに託して詠んだもの。身も心も痩せてしまった悲哀が感じられる。

4) 老いぬれば涎を垂らす体たらく 松田 昌康

立派な風体の獅子も年を取れば締まりがなくなって涎を垂らす仕儀となる。獅子の像から垂れている水を涎と見た感覚はユニーク。

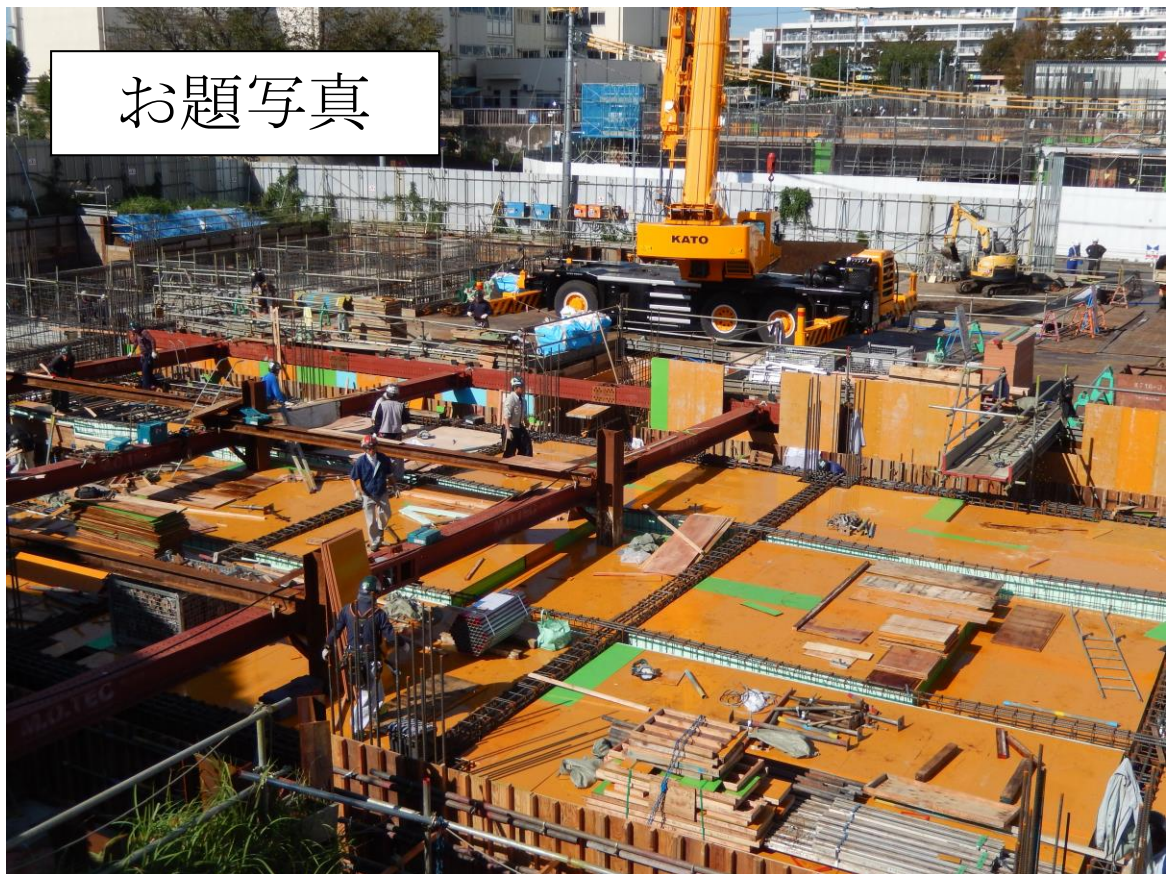
5) つつましく自然と生きる暮らしあり 長尾 進一郎

山間の僻地の小さな畑を牛をつかって耕やしている、現在の日本では見られない風景だ。そのつましい情景を可哀そうとも寂しいとも感情を出さず、淡々と描写している句に好感が持てる。

6) 暮れなずみ燃え木の爆ぜる酉の市

大越 浩平

空はまだ明るさが残っているし、お店は準備中で客の姿は未だない。景気づけの焚火もやっと燃えあがった段階で、僅かに木の爆ぜる音が聞こえる。酉の市の準備をしている珍しい風景だ。



寸評：今月の御題写真は、大月さんの提供。ご自宅の隣地に高層のビルが建つらしい。はじめのうちは日照権やら騒音やらで心配したが、建築の進行を見守ると愛着すら湧いてきたという。

1) これが建ち地方の過疎がまた進み 下山 健夫

都会への人口集中は頭の痛い問題だ。

2) 折り込みに「分譲豪邸」文字踊る 大月 和彦

折込には兎小屋とは書かないが、「豪邸」とはどの大きさなのか？

3) 大枚を払ったあげくに水浸し 矢澤 正二

先日の豪雨禍を思い出す。見晴らしの良い最上階に住むことになったがエレベーターが動かないとか、水が出ないとか、どうしてくれる？

4) 地価上がり税が払えず土地を売り 下山 健夫

相続税の税制が変わり結果として土地は大企業に買われていく。

5) 間に合うのこんなペースで五輪まで 長尾 進一郎

全ては五輪開催に間に合うように。

6) 増税に五輪特需のあと怖し 松田 昌康

五輪が終わってから10%への増税の影響がジワリと出るのでは？

7) 行く秋や騒音消滅ビル落成 大越 浩平

建築騒音こそ無くなったが、入居者がいない寂しい秋を向かえることに。